WASON
HQ
1104
J74+

Oct. 10
1885
no. 6

驛遞局認可

明治十八年十月十日發行

女學雜誌

第六號

東京萬春堂

CORNELL UNIVERSITY LIBRARY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

五常の歌 (信) 小車にくさびもなくば如何せまどこれぞ誠はたのもなりける

●女學雜誌第六號目次

文部省第九號達●女禮式の改良を望む●雜報數件●イーストレーキ夫人の演説。更科の月を思ふ。祝女學雜誌第五號發兌(今樣)。和歌。納涼外一首●梅香女史の傳付圖●七草を見る記。文字ぐさりの事咏歌を用ひて有益ある事に施す。庭訓の文言虚事にあらず。重語とて嗤ふ可らぞ。西洋人の和歌一首●裁縫の教。上古の衣類。造り花の簪。昔れ不自由でれじやつた。化粧の道具●小町の辨。小兒營養上に關する事。扶風曹氏の事を紀す。さんごの珠。日本れ女子は男子より長命あり。婦人慈善會記事●假名の答。倭と和との問。眉を削る問●諸廣告數件

十月十日

明治十八年間 女學雜誌發兌日表

七月	廿日	
八月	十日	二十五日
九月	十日	二十五日
十月	十日	二十五日
十一月	十日	二十五日
十二月	十日	二十五日

廣告正價表

一行一回掲出	但廿三字詰	前金五錢
同三回以上	同	同一割引
同六回以上	同	同二割引

報告

當分毎月二回の發行と定むると雖とも事業の整頓するに隨ひ漸次回數を増加して毎週一回の發行とすべし●本誌は必ず前金を要するを以て御注文の節は代價郵税共御送付を乞ふ●郵便切手代用は堅く御斷り申上候但之不得已者に限り郵錢切手一割増にて申受候●爲替は東京芝區新橋郵便局へ向け御振込被下其爲替券を弊堂に御送付可被下候●詩文和歌發句等の原稿御投寄の節は作者の國郡町村姓名等明細に御記入可被下候

女學雜誌代價郵税表

一冊	正價四錢	郵税一錢	合計現金五錢
十冊	同卅八錢	同十錢	合計前金四拾八錢
廿冊	同七拾錢	同廿錢	合計前金九拾錢
卅冊	同壹圓	同卅錢	合計前金壹圓卅錢

但之毎號十冊以上づゝ取纒めて御購求被下候方へは賣捌所同樣特別割引可仕候

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌第六號　（明治十八年十月十日）

●文部省第九號　府縣

從來特に女子師範學校を設置し居候向は師範學校に合併すべく且向後女教員を養成候節は師範學校に於てすべき儀と心得べし此旨相達候事

明治十八年十月一日　文部卿伯爵大木喬任

（明治十八年十月一日官報）

○女禮式の改良を望む

禮式とハ他人に對して身分相應の取扱を爲し彼を貶とさず吾を屈せず彼我の間だの關係を其まゝに交際上へ現ハさすべき道を云ふとあり此故に君主に對する禮を臣下に施さバ彼も我も不和の元を爲すべく父母に對するの禮を君主に行ハヾ亦た彼も我も不和の元を爲すべし父母ハ父母、君主ハ君主、と各かくべつの關係あるとゆゑ亦た隨て格別の禮あるべき筈なれバ禮と云ふ時ハ何れも皆な禮あれども其の式に至りてハ對する人〻會する場に應じて相違なかる可らず之を喩ふるに禮式とハ他人へ對する吾身ハ心持の如し此の心持を或は口に言ひ或は身態に現ハして偖て吾身が彼に對して有する所の無形の心持を實際に示し彼をして之をさとらしむる譯あり然るに大古野蠻の時にハ彼我の間ぶのかゝハり合ひたゞ戰爭分離のみなれど固より平和を望む爲めなる禮式なんどあらんやうはなかりけれど其后酋長と云へる者起りて數多の人〻を臣從せしめいたく之を壓制し臣下は亦た之を神の如く尊みて何事にも屈從しゝる比はひより禮式と云ふと初て大に起り其後世の開けて事〻のいろ〱に復雜なるに從ひて此の禮式と云ふとも亦たいろ〱に小六ヶ敷なりて意味も分らぬくだ〱しき事を行ふをバ返りて高上なるやうに覺ゆる有樣とハ爲れり此の故に禮式と云へる道ハ眞の主旨を誤りてひたすらに之を飾るとのみに注意し來

り今を爲りては只だ面倒にて六ケ敷とのみを禮式とは心得るさまと爲れり此れ必竟昔時の壓制時代よりうけつぎたる誤解にして何處にも皆なこれあることならんとは云へ東洋諸國の如く自由と云へる事の尚は行はれぬあたりには禮式の摸樣も特に此れ樣のあやまりに陷ることなり

抑も禮は和を尊しとすることにてたゞ他人を尊敬せんとのみの主旨にはあらず然れば若し禮の式にして反つて交濟上の不便となり互ひに親睦を增すの妨とならんやうならば是れ果た禮の本意ならんや恰かも是れ樂のさかもりせんとて藥を飲むに異ならざるべし成るべく心持を其のまゝに現はすやうに取りなして而も不敬に失せざるやう然りとては亦た無下に吾身を卑しめざるやうにするこそ眞の禮式なるべけれ支那國に於て客を招待するや客應じて門に來れば主人あはてゝ戸の外に立ち出で此樣に汚き茅屋なれば御身の衣服をや穢がし奉らん曲げて入り玉ふ勿れ食料とてあかざ麥飯の麁品なれば御身の口に適ふべくもあらず曲げて入り玉ふ勿れと壓して客人をつき戻すべし此時客は再三此を謝し如何樣なりとも馳走にあづからんと云ふことしば〳〵あるより主人遂に客を誘ひて堂に入る堂に入りて后ち客等互に席をゆづり又は成るべく食ひ物をたべて殘りあらんやうに愼み言ば數成るべく少くして無言なるほどを宜しとすると禮式なり然るに歐米各國に於て客を招待するやう客門に至れば主人よろこび出でゝ之を迎へ未だ一見なき人なりとも旣に舊知巳の如くもてなして寒暖時宜の話は成るべく少く情切のものがたりのみ多く食物出でゝよりは客は決して相讓らず喜びて成るべく悉く味はんとし主人は必しも之を强ひんとせず一家人の如く睦み談りて心置きなくもてなすと禮式なり此れ共に待客の禮式にしていづれも客をもてなさ

んとの心に上下となくとも一に和を尊しとし一ハ數百年前の遺習を守らんとし一ハ文明自由の風を宜しとし一ハ壓制束縛の有樣に甘んずるよりの相違あるべし

此故に禮式なるものは成るべく彼我の關係を其儘に交濟上に現さんやうに覺悟して主旨とする所ろハ和を尊しとせるに在りと心得べし由ては世の開け行くにつれて禮を現ハす所の式に改革を爲して時世相應にもてなさゝる可らず博士ジョンソンの比ろハ一夫人が來りて其の頸を抱き之と接吻せしなんどの事も禮式なりしんが今となりては斯る醜態を非禮となすべく數百年前英國にて魚鳥の肉を食ふには唯だ三指を用ゐるを禮とせしなれども今となりては一本の指だも肉に觸るゝを非禮となすべし然れバ我國の如きたとひ小笠原流の禮を以て昔日の儀式となせしとハ云へ之を今日に用ひんとするハ尤も愚なるとなるのみならず反て非禮のとなるべし

斯く述べ來りて偖て今日小學校に行なるゝ女禮式なるものハ宜しきに適ひさるや否やを問ふ人あらんに固と此の禮式たる日本在來の諸禮と西洋各國の禮法とを折衷して完全なりてふ一流の儀則を設けられたるものなれバ吾人が茲に彼是し得べき筈なきは勿論なれども彼の爵位を受くる雲の上へ人は夫妻同樣に其の位を得らるゝ程の次第にて昔しハ婢とも見做されたる婦女の今まは男子と同等の取扱を受ると歐米諸國の文明風と一樣なる有樣になれりし時に臨み追々外國との交濟廣ろまるにつれて夫と共に外人と交濟し玉はんとき目八分に膳を上げ方疊緣ふまぬの足の運び方にて夫もろとも交ハり玉はんとにや亦さは夫ハ洋風にて妻ハ和風にせんとの事にや不都合少かるまじく特にも近來小學校を初め大學校の子弟までも運動の科に昔しなき勉強を爲すときに當り婦女教

育て成るべく身を動かさぬやうにとてなすことのミを本意とすべきにや日本人種を改良して吾が國民の身体を強壯にせん爲めには男子のみ活潑となりて婦女は依然たる舊觀あるを宜しとすることにや彼れ是れ思ひ合はすときハ尚ほ改良すべき所なきにはあらざるべしと答ふるの外なきやうに覺ゆるなり然らバ此を如何様に改良するを可なりとせんかと問ふ人もあらんに此は尚更ら吾人の答へ得べき所にあらざれとハ云へ婦女改革の任に當れりと自任するの余り少か卑見を説述することを敢てすべし

●舞踏の稽古　赤坂表町に居留の東京大學豫備門教師英人コックス氏ハ其夫人と共に舞踏の妙手なるより自家へ舞臺を設け此道を教授するに付き當今では華族貴顯の令孃等陸續入門され頻りに勉強し卒業の上は鹿鳴館の本舞臺へ出で其伎を外國人へも見せると云ふ大奮發の由なり

●華族女學校　同校にて去る一日の試驗に入學を許されしは皇族にて一人(小松宮の姫君篤子女王)華族にて五十一人士族にて五十九人平民にて廿一人すべてゝ百三十二人なれど募集せられし人員よりもなほ缺て在れバ志願の者はその規則に隨ひ願ひ出る任に入學を許さるゝ趣なり又た世上には其の娘を此の學校に昇せまく欲く思ふも上つがたと同じく美服着せではあるまじき様に心得て止むものあるよし噂すれど然る事とゆめ〳〵なし木綿にもあれ唐桟にもあれ垢ざに着かずバ誰も〳〵身分相應の衣服にて決して無理に装飾するに及バずさりながら同校の内規としてすべて黒無紋の袴に靴だけは穿しめらるゝよし

●明治女學校講話會　飯田町壹丁目なる同校に於て本月一日午後一時より婦人の集會ありしが府下に寄住せらるゝ米國人ミラル氏夫妻及びイーストレイキ夫人(博言學士ワルリントンイーストレーキ氏の母)

も臨席せられイーストレーキ夫人と英語にて今日婦女教育の必要あるを丁寧に說かれ校主木村氏之を口譯せり次にミラル氏も婦人の教育ハ其の一身に必要なるのみならず一家の爲め子孫の爲に無くてならぬ者ありとの意を日本語にて說話せらる同日婦人の參會せる者四十名程ありき以後も毎土曜日にイーストレーキ夫人の講話あり且つ婦人の風俗など何くれとなく此會に於て質問する人あらバ打解たる說話をせらるべく又ミラル夫人（十餘年前横濱に女學校を設立して日本婦人の教育に有功の人なり）も編み物縫ひ物等を授くるよしを承諾して金曜日午後より臨校せらるといふ

●束髮の簡便法　流行に後れず束髮に結で見たものの自身では結び兼ると髮結を頼む方があるまいとハ云れぬ斯云ふ御人にハ私家傳の渡邊結び乃至和崎結びと云ふに遊バせバ他人の手を借るよも及バず見掛も大層宜しいと束髮會の本家本元渡邊鼎さんと和崎義路さんよりのお知せでござります

●挿釵の爲に傷を受く　清國の或る地方に於てハ挿釵　寶　娘とを混同する風あるより容易ならぬ出來事あり此の頃の事とかホンキユウと云へる處に大勢の人數集りて十歳許の少女を引廻ひ渡せ遣らじとの爭にて遂よ少女を傷くるが其の原因を聞くに此の少女と今年七歳になれる某男子と行末婚せしめむと雙方の親共協議整ひて少女を男子の家に引取り居りしに男子は不幸にして病死したりしかバ少女の親達も之れを取戻さむと掛合よ及びしに男子の父母も一旦結婚の約束を爲し丶者なれバ生涯吾が家に在りて孀婦にて暮らす可し取戻とて聞ぬ申さずと言張りて中々承諾せぬより斯る事に至りしなりとガゼットに見ゑたり（本年十月三日明治日報）

●女教師拜命　東京府士族津田梅子（津田仙氏の次

女)ハ今回宮内省に於て准奏任御用掛(年俸四百二十圓)を仰せ付られ新設の華族女學校教師を拜命せり

●女子洋行　麹町永田町二丁目の香川宮内少輔の三女志ほ子(二十四年)ハ今回英國へ文學研究のため渡航さるゝ由に聞けり

●束髮藝妓　柳橋の藝妓米吉は大の〳〵西洋好にて此程も束髮に改ため洋服を着込まして夫でお坐敷へ相かはらぞ今晩ハと出掛けまれとヒヤ〳〵

○イーストレーキ夫人の演說

同夫人が婦女教育の必要あることを明治女學校に於て講話せられたる由は前項にも記わりますが今其の演說筆記を得たる故左に掲げて御覽に入れ升

過日東京諸新聞を閲せしに我名を明治女學校の教員中に列ぬるを見て一度は驚きたり是れハ折々當學校へ來りて講務を助けんと云ひしことを誤り傳へて直ちに教師の一人と思ひし者と見ゑたり され共此說傳ハ自分をして此學校に對し一層厚き關係を後日に生せしめ新たなる義務を盡すべき自然の緣ある理を胸中に感せしめたり自分ハ平生人類の同胞姉妹に對して感情を有し其幸福を願ふが中にも日本婦人の爲めに此情特に深きあり日本國民近年に開化に進むの度非常に速かなるを以て西洋諸國にも名を知らるゝに至り日本の美麗なる島にハ世界の眼を注がしめたり外國人ハ日本の情態を談じ又ハ賞し又評することとなれり今日の日本婦人にして愛國の念ある者も婦人の位置を高尙にすべき時機なりと云ふべし今日に於て婦人の位置を評するの辭を聞くに尙好評を得ざる者あり是ハ日本婦人の才德未だ大に發達せずして西洋國人の十分なる賞讃を得るに至らざるが爲めなり此時に當りて日本人の設立に係る本校の如き者起り功を未來に奏せんとするは最も祝賀欣喜すべきことなり是の計畫の如きは日本婦人をして歐米諸國の婦人と同

一の進歩を爲し同一の教育を受けしめんと冀ふ爲めにして真に愛國の事業と云ふべし日本婦人が社會上に高尚の位置を占んとハ教育の外に物あらざ何となれバ心智を開發するの道ハ唯教育の一事に在るが故なり此に婦人あり美麗にして愛すべく且温順の性質を具へたる時ハ人をして之を慕ふの念を起さしむるも此婦人にして才智ならしめざ人をして憐むべく且品等下劣なりとの念を發せしむべし（未完）

○更科の月を思ふ　根岸　花井のため女

月ハ常にあれども秋こそ殊にまされと故人の云はれしハ實にもと思ふ秋の夜に今宵信濃路の更科の里に在りて田毎の月をながめしならバ如何な心持よきなや抔ひとりごちしてけれバ何となう隣騒がしきも擣衣聞くがごと思ひまた戸たゝく風も鶏にやと怪しむもをかしく五條あたりならねども賤がふせ屋の軒端もる月をながめて終夜寐もやらぬうち更科のうバ捨山のこと心に浮ぶにつきても「我こゝろなぐさめかねつ更科や姨捨山に照る月を見て」の古歌に我身も振袖着つゝ神詣せしを此頃と思ふうち今ハ早秋風立ちし古團扇のごと骨も陽に見ゆ月の眉墨とやらハ過ぎ去りて頭につもる白雪の老の身とこそハ成りにけれ、御世なれや此額に涙よする嫗を捨る者もなく子等や孫等のいたはりて歯にあふものよ風召すなと優しう扱はるゝ程なほ我身を耻る思ひあり若きときより人に勝れる功しもなく今はた朽はつるぞ物憂かりしも巻き返されぬ繰言にて止むより外ハなかりけるが今より生立たるゝ女子衆ハ若かる時に功を立て老ての後ハ安らけく世を送るべき其計畫ハ老ぬうちにぞ有るなるべし、時移り世變りて嫗とて捨らるゝに至りなば露けき袖ハ絞るとも月毛の駟馬も及ぶまじ今の世とても兎にあらねど多くの中なハ年寄を餅に搗とや聞たれバ我身の覺悟ハ若かるとき爲し置く

こそ望ましく其覺悟とハ身を謹しミ家計を專ミ約々に氣の怠りを自ら飛しめ正しき道を踏み行かバ
心の闇にも迷ふまじと月の光ふふでをとる

○祝二女學雜誌第五号發兌一（今様）　伊藤さめ

東の空ふ霞立つ。隅田堤もふくやらん。文字の林に言の花。八千代の外にかをるらん。

○納涼　武陽高麗郡粟坪村　細田せん　十一年五ヶ月

舟つなぐ柳が下の涼しさに
歸る家路も忘られにけり

○　美作國西北條郡香々美村　武田わさ

少女子の手にとる鞠の錺り糸
かざりにざにもすじぁ違へそ

○梅香女史の傳　月の舍主人　錄

第五

秀才玉を吐く講堂の上　（天）
佳人涙を呑む演檀の下

斯て后ち青山梅ハ志を所ろいよ〳〵堅く學ぶ所ろますゝ〳〵進ミて三四年を一日の如く送りけり春は花咲ひて軒端の梅が香れど梅香は依然として讀書の樂より離れぎ秋ハ夜晴れて青山の月も遊べど女史ハ嚴然として書室の窓だも開かず夏の螢、冬の雪、ハ反て勉學のたよりと爲りてあか〳〵ミ風流たる心なんど起らんよしもあらりきされバ數多き女生徒の中にハ之を頑なとして忌むもあり其秀るを羨むの余りにねたむもありたり特ふ梅の性質のをさ〳〵丈夫にも劣らぬほど活潑にして慷慨の氣象面ミあらはるゝとも數バなるから之ど親しみて末かたく交り結ぶ人もなかりき然れど彼の松本孝と云へるハ性質いと温和にして優雅の体そなハり言のいひざま友へのとりなし梅とハ全く表裏を爲せど人の交ハその質の相ひ違ひしものふ於て初て固きものあれバまや二人の間の交ハ水魚蘭契の昔がたりに倘ほ及バずと見ゆたるこそ學校内の一奇事ぞと人々は言ひ合ひたり」今年は彼の

澤山、田中、古木なんど其他五六人忘れるうちまも敎へ人の骨折にて學期の盡るともろともに早や卒業の廻りとあり今日はその証書の授與式とぞ聞ゆる凡そ學校の價値ハ卒業生の品位ゟ由りて定るものなるを此時早や三年四年の苦學に心を練りたる梅香の目にハ此の卒業生等の學才尙や足らぬとや思ふと多かるべきを彼等ハ揚々として自得の色ある上に身態の此頃とありて急ハかく變ハりし樣に覺ゆるも尙更に心にくヽ祝の場所なりとも臨まんハ心地よからずとつ

ふやくを例の標本に諫められて年も中ばの六月それの日午すぐる比ろ講堂に出で集りぬこの折り堂内の景況なんぞくぶ〳〵しけれど茲に畧きぬたゞ梅の心中よ續々として起り來りたん思の糸を引き出でゝ見れば

あゝ彼の方々が卒業生として世の中に出で此の學校に代表し玉ふよや歎げきても尙ほ歎ぞべきことなり又た彼方々こそ此れより如何にして婦女社會の改革者とならんとはせらるゝか今日此の頃ろにはの衣服を飾り早や身を飾するのさき〴〵を尋づねらるゝもありとか聞く實よわさましきは婦人なり一生男子の下に立ちて其の束縛を甘んじても動物に均しき肉慾の奴とありたきとや思へば世の中よ男女なし男女とは只だ戀と云へる忌まはしき一物に支配せらるゝ人口の言ふべきとなりわれ等は國家の爲め力を盡さんよりは外に樂しみなしとは思ふアゝ如何にもして男女を同權の地位に至らせで置くべきか夫れにしても彼の方々はアゝ何故にかく卑屈なるや

とも云ひたんか言はぬ心の奥の底は此の傳ふるす主人よも知れざりけり斯て式も半ばとなりける比ろ拍手のひゞきともろともに堂の前面に立ち出でたる一個の秀才あり威風凜乎としてあたりを拂ふ堂々の氣配を表に示して祝辭を述べ其のゝてにとて一論説を演舌しける言の葉末ふとぶ玉はきく人々の心を溶きけり

○七草を見る記　明治女學校の　とま子

頃しも秋のなかばにて野山のけしきいとおもしろきが中にわけて隅田の川ほとりなる園の秋草をみむとあまたの人のつどひ行ときくものからこを見むとしてやみなんはいとほいなし行て見ばやとひるすぐる頃よりやどと立出でやゝのてのしてに至りつき園にいりて

みれと七草のわれおとらじと咲みだれたる花のうちふわけて色よき紫の桔梗のすがたのやさしげなるにおとらぬ色のふじをかきのそそにまつはるかるかやの乱たるもをかしし誰をまつらむ女郎花いとなまめかしう立るすがたなどにわくがれてそこゝとそゞろありきに時をうつしけるに日もやうやくかたふきたれバ園を出んとするにうらみがほなるくづの葉やまねく薄よ心ハ殘れど今はとてあるじにこひて手折たる萩の一枝をかざしつゝつゝみをもどる折からたづさへたる花の色さへみゆるまでてりわたりたる月かげなおもハど家にかへりさるは明治の十八といふ年の八月十五日なりき

○文字ぐさりの事　　淺草森下　方六庵

今の明治の御世より先に俗に寺子屋といひて和樣の文字を習ふに當り一二の手本を上れバ男女共に都路といふを習ふを常とす此都路とハ當時江戸より京都に登る東海道五十三次を子供に覺えさするものなして始めて文字ぐさりを示せしなり其文に

都路ハ五十次餘りに三ツのやど。とき得て咲や江戸のとな。なみ静なる品川や。やがて渡らむ川崎の。のき端並ぶる神奈川ハ。そや程ヶ谷の程もなく云く々(頓て越來ると書したるものハ誤りあり山ハ越といひ川は渡るといへバなり)

是より追々上達して後に源氏名寄の文字ぐさりをも敎へたるも通常何れの師匠も同樣にて此源氏は先に貴社投書を掲載されたる

源氏のすぐれてやさしきハ云々の文章なりし

此文字ぐさりは古くより成し來るものにして或ハ嚴文の一とて卑めさる人もありしかど女子が徒然の時などの慰みにハよき興あるものなり嘗て宇都宮の松野松子といへるが其友ハ送りさる文を見たる事あり今其記臆せしを記して女子方に告ん

一筆示し上まゐらせそろ、ろく〳〵其後はれ尋も申さず打絶候ところ、爐の間も漸く、工事を終へ、緣刺の席も出來上り候まゝ、間開きの眞似いたしたく、九日ふハ、お待ち申上候ゆゑ、遠路恐入候得ども、門葉の方も連れにて、手前へお出下されたく、呉々此よし申上そろ

此文ハろに起りてろに了る是ハ戯れに書しものなるべけれど一寸面白し左れど斯ることに腦髓を費されよと云ふにハあらず只俳優を評す等の閑あらバ是等と以て一の樂しミとするも面白かるべしと申すのみ

○咏歌を用ひて有益の事に施す

徒らに思の切なるをよみ出でゝみだらしき戀の歌となし空しく月をながめてはかなきのかこちを爲さん迄でふ歌を用ひなば世に何等の益もなからんが彼の持資又ハ周防守の如く之を轉じなバ不龜手の藥亦た大用すべきものとや云ハんむかし太田の道灌持資君に從ひて戰ふ趣かんとし海邊に來りて潮の滿干を知んやうもなかりきとき彼の 遠くなり近くなるみの濱千鳥なくねに潮のみちひをぞ知ると云へる古歌によりて潮の退けるをさとり大軍を進め又あるとき河をわたらんとするにいづこの瀨の淺かるを知らんたつきなかりき時又かの 底ひなき淵やハさわぐ山川の淺き瀨にこそあだなみハたてと云へる古歌によりて淺瀨を渡れりとや云かたふ之と同日の談にハむかし京のある醫師夜る數人に要せられ目を覆ハれかごに載せられて方角も知らぬ山の奥につれ來られてこゝに數多の人の集どひたる中に頭めきたる人の児ずを療治せしめられ了りて又た目を覆ひかごに載せらきて送りかへされぬれバいづこに行きしとあるや自らも辨じがたくて之を人にはなしたるを板倉周防の守きゝ入れて他になにか心あたりの事なかりしやと問ハれたるにされば其家内に佛法僧のなくをきゝたり

と云へり周防守はたゞ手をうち古歌に　鷲の尾の山の奥にも人はすむぶつをふさうのなくにつけてもとあれバ定めし鷲の尾山あるべしとて人をし窺はせたるに果して山賊の大巣窟ありけれバ捕卒を送りて悉く捕ゑしとぞや此れ皆な無用に似たる遊藝を轉じて有益に用ひたるの好例なり之をかの有益の書を學んでなほ有益の事に施す能はざるものに比し果して如何ん

○庭訓の文言虛事にあらず

玄惠法師が庭訓往來に白紙拂底之間所用反古也更非輕賤之義と書たる文章余情に書たるにて實事なれあるまじき書歟とおもひしに頃日永享嘉吉の頃の禁中日記に反古を用ゐきたるを見たりさからば庭訓の文言虛事にあらぞ今の世には卑賤の人といへども書狀に反古をバ用ひぬあり先進の禮樂におゝる野人なるてとゝくれ如し(三省録)

古へすべて紙さなきだ少くしてすでに薄墨の綸旨とあるは反古を紙屋川にて漉返したる紙なればうす墨色なる故に号く(今の鼠半切のごとし)また紫式部が源氏ものがたりをバ經文の裏に書しと云なるひは定家卿の小倉山莊の式紙毛利家の家士豊田氏の持てるさびしさなの歌も式紙反古よりきたりまた弘法大師の鼠心經といへるを見たるにこれ亦た反古のうらに染筆ありきかゝれど其外にもあまたなるべし古白紙拂底にて質朴の有さまを見るに足るべし云々理齋云へり

○重語とて嗤ふ可からず　駿台　紅毛女史

赤い緋縮緬錢湯の湯半紙の紙なぞの類誰もその重語を嗤はざる者なけれど是れは別に笑ふべき事でもあるまいと思はれます緋縮緬にも色のさめたるのあり湯にも温泉あり藥湯あり紙にも亦種々樣々の差別あり其種類を明かにするが言詞の妙用なれバ別に咎む

べき事でも有ますまい總て言詞には語勢と辨別とが有つて是非とも然いはねバならぬ場合があるもの夫故伊勢物語をはじめ源氏にも枕の草紙にも此類の言詞は常多くありますゆゑにおみきおを帶の類も大御酒大御帶と云ふ事なるを偏よ重語と見るは少し片腹痛い話しであります

○西洋人の和歌　　山陰　萬山老人

或る西洋人が日本人に和歌を以て一層勉強せよかしと勸めけるとあん今其の歌を得たるまゝ左に記送す

皇神の下したまへし日本ぶま
みがけやみがけ光り出るまで

○裁縫の教（第二号のつゞき）

足袋屋の手初めは先づ綴くけより廻し縫ひ俗に所謂足袋の尻縫に及び其れよりクシを習ふて甲立爪縫と順次ふ進むものなり抑も此の爪縫なるものはちと六ケ敷きものよして下手に縫へバ指の所が上を向き甚ざ履き惡きものなり故に爪縫は一ッと申て親指の方は内とてまたの方よ三勢程取り四ッと申して四本の指の方は内に二勢半程も取り外は大より漸々小に及び終ふ幽靈と一般消ておくありて廻しとぞなりぬるなり廻しと一の方を少しく堅くつり四の方は少しく緩るくのべふんわり手に持ち之を縫ひ廻すあり衣服と足袋も一通りのとの出來るに至れバ是より愈よ裁ちに及ぶものあり衣服の裁ち方を學ぶには紙ふて木綿一反何分の一の雛形を以て一ッ身二ッ身三ッ身羽織等寸尺を能く記臆て簡易なるものより漸次ふ裁ち學ぶあり扨て足袋屋の裁ちより底の裁ち甲立の裁ちより手甲の裁ちと漸次に股引腹掛等ふ及ぶなり既に裁ちも縫ひも略ぼ出來て愈よ本物よ取り掛り之を裁縫せんとするときは先づ反物の寸尺を能く取り調べ次にしみ疵等の有無を改めて若ししみ疵等のありしときは其しみ疵の成るべく的目ふふれぬ所に送り込

みて之を裁縫をべし（終）

○上古の衣類

上古の衣裳楮の業に形をかく乞巧天に備へ祭ること楮は上古の衣類なればありカウヅといふを略してカヂといふカウは上なり上野の類なりヅとも源氏ものがたり其外古き言葉に衣類の事を御衣といふまた衣通姫などの類あり今も衣類の手の出る處をツヂといふ末のところをスソどいふ故に楮は上代の衣と言こゝろなり上古蚕織もいまだ委しからざるときこの楮の皮を剝ぎ打柔らげほそく裂きておりなし衣とせがと其時は楮の名をイブど呼ぶ麻をもころもにをりて用ひたが麻とうすきものなれば朝のみ着て麻楮と名付しなりそのゝちもろこしより木綿出たり楮よりまされる故楮を木綿に換べしにより木綿の二字をイブといふ和訓を付たるなり今は神前へ幣帛といぶハ麻楮にてこしらへたる紙を捧ぐる故實とは成りたり

と或る文に見えたり

○造り花の簪　徵古迂史（若宮）

近頃束髮の追々流行して簪も彼國に倣ひ薔薇等の造り花を以てせり我國にても造り花を簪させしは元文（今を距る百五十年）寛保の頃に舞子などの金銀にて梅の枝に色紙短冊を付てさし往來動作する時は音のする樣にこしらへたり延享元年停止され其後象牙角鼈甲等にてこしらへたりといふ然るを寶曆の初より流行し吉原の禿に倣ひしなどいふも一度止で後の度を始と思へる僻ごとなり吉原の禿も舞子に倣ひしものなるべし

又簪に二義あり一を揷頭花といふ揷頭花は髮刺の義風流に花を折てさしたるがもとにて是を細工し意巧を加へて樣々になせるなり

○昔は不自由でおまやつた

さて衣類なくおれが十三のとき手作りの花染のかた

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ぴら一ッ有るより外ハ無かりしその一ッかたぴらを十七の年まで着けるによりにねが出て難義ハわつさせめてすねのかくれる程のかたぴら一ッ有しやとおもふた此やうなむかしハ不自由なる事でおざやつたまた晝飯など喰ふといふ事ハ夢にもない事夜食といふ事もなかつた今時の若い衆ハ衣類のもの好みにこゝろを盡し金を費し食物は色〳〵の好みとをめさるゝ沙汰のかぎりとてまたしても彦根の事といふてしかり賜ふゆゑ後にハ子供ともに彦根婆々と言れしあり（おあんものがたり）

○化粧の道具

紅　白粉　櫛　眉墨　眉掃　鏡　三櫛　筋立
笄　簪　尺長　髷結　水引　油　元結　鐵漿
洗粉　糠袋

○小町の辨

小野小町の事つれ〳〵草その外の説まち〳〵あれども定りあらず長明が無名抄など考へ合すれバ小町が盛りは業平より以前のやうに思はる余このころ新井白蛾の小町辨を見けるに其解説明瞭にして宿年の疑惑を氷釋せしむるに足る者あり曰く古代にハ一國より一人づゝ釆女を内裏へ献せしとあり既に仁明帝の前後にも小町を召されたる者六十餘人ありしとなり此釆女を小町の内に居らしめ給ふゆゑに皆々小町と呼バれたるなり其人々の宮仕へを止めて故郷に歸り身まかりける墓を大かた小町塚と呼びしとなん扨こそ國々に小町塚と云ふもの多し美濃尾張の間にさへ二三箇所あり然るを凡ての小町を一人と思ふより紛れたる説多し譬へば實方朝臣陸奥へ下向のとき髑髏の目穴より薄の生出で秋風の吹くに付けてもあなめ〳〵の歌の小町は小野正澄が娘れ小町なり文屋康秀が三河掾となりて下りしとき身を浮きくさの根をたえて誘ふ水あらバト詠して高雄國分が娘の小町なり

思ひつゝぬればや人の見えつらんの歌又た業平の舞の袖なと云ひしも出羽郡司小野良實が娘の小町なり高野大師の逢ひたまふ壯なるとは憍慢最も甚だし衰ふる日愁嘆猶ほ深しと答へしは常陸國玉造義景が娘の小町なり此く一人ならず故に時代其の外異なるとあるのみ中にも良實が娘の小町も美人にて和歌も勝れたれバ獨り名高く總て一人のやうに傳へ來れり

○小兒營養上に關する事（第二号のつゞき）

今ま初生兒を養育するに當り大氣及び日光の感作を緊要なる榮養物となす所以のものも此の二物の良不良過不及も大に榮養上に障碍を及ぼすを以て固より言を俟ずと雖ども食物に至りても亦た特に緊要とせざるべからず蓋し食物を與ふるに其の法自からありと雖ども世人此を知らざればこそ儘其の生兒をして或は虛弱とならしめ或ハ死に至らしむるなり抑も或る動物ハ特に樹皮を食して生長し又或る動物ハ硬き骨を消化し其内より最も善良なる滋養物を食するを以て能く成長すと云ふ是れ其の動物に於てハ左もあるべけれど人身に於てハ決して此等の物を以て食品となす能はず如何となれバ人身の消化器ハ右等の動物と其の造構を異にすればなり故に例令ひ強て之を食せるとも啻に效なきのみならず却て害を速くなり

今乳兒と大人との消化器の差異も亦た人身消化器の右動物に於けるが如き大差あるを以て食物に於ても亦た自から異ならざるを得ざるハ素より言を俟たざるなり是れ特り乳汁は初生兒に適當せる無二の良食物となすも他の食物即ち夫の穀類等を以て製したるものに於てハ消化し得ざるを以て却て害ありとす故に初生兒に於てハ専ら生母の乳汁を與へ而しても し其の生母に妨げある時ハ乳母を用ひ乳母亦た妨げある時は則ち牛乳及び其他の食物を與へて以て人工

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

育兒法を行ふべし然れども稍や成長するに隨て通常一般の食物を徐々用ひ來りて敢て妨けなしとす

（をはり）

○扶風曹氏の事を紀す　磐城　芦野明日香

扶風の曹氏ハ班彪の娘にして班固の妹なり名を昭字を惠班一名は姬長じて曹世叔に嫁す博學高才にして婦德備らざるなく婦道閑らはざるなし兄班固漢書を脩め中道にして歿す曹氏兄氏の遺志を繼ぎて遂に作る其第四を婦行篇と云ふ摘出して以て世の娘嬢諸子に示す

女に四行あり一に曰く婦德二に曰く婦言三に曰く婦容四に曰く婦功夫れ婦德と云ふも必しも才明絕異を謂ふに非らざるなり婦容と云ふも必しも辨口利辭を謂ふに非らざるなり婦容と云ふは必しも顏色の美麗を謂ふに非らざるなり婦功と云ふは必しも功巧の人に過ぐるに非らざるなり清閑貞靜節を守ると齊整己を行ふに恥あり動靜法あり是を婦德と謂ふ辭を擇で而説き惡語を道ずして時ありて然る後言ひ人に厭はれず是れを婦言と云ふ塵穢を盥浣し服飾を鮮潔にし沐浴時を以てして身を垢辱なせず是を婦容と謂ふ專心に紡績し戲笑を好まず酒食を絜齊して以て賓客に奉ず是を婦功と云ふ此の四ッの者は女人の大德にして乏く可からざるの者なり然れども是を行ふ甚だ易し唯心を存ずるに在るのみ古人言へると有り仁遠からんや我仁を欲して仁斯に至ると此謂なり

明日香曰く此文譯して俗文となさゞるは行文平淡女子と雖共解し易く且つ俗文となすときは徒に冗長に渉るを恐てなり看者之れを諒せよ

○さんでの珠

女は織縫の所作をなすを定れる職分なりたとひ高貴の人の娘たりとも既に嫁入して夫に事るときは夫の衣裝は自ら織縫せべきとなり況んや其の下たる

ものをや(内訓)

諺に曰く兄弟ハ一塊の肉婦人ハ是れ刀錐とハ其の剜割に任せるを言ふ兄弟は一釜の羹婦人は是れ塩梅として其の調和に任ずるを云ふ大抵婦人は利を輕んじて言寡く思多くして怨み少なけれバ人家の災害をおさゝるに幾し(閨範)

いにしへ女子の嫁入する時其の母中門まで送りていましめて曰く汝が家に行きて必ずつゝしみ必ず誠めて夫の心に背くこと勿れと云へり是れ古の女子の嫁するとき親の敎ふる禮法なり女子の父母よく此理を言ひきかせいましむべし女子も又たよく此理を心得てまもり行くべし(童子訓)

婦人ハ多く少壯に富貴を享けて暮年に無聊なるものなり(世範)

○日本の女子は男子より長命なり　若宮錄次

年齡	男十八に對する女の數
●六十年以上	十八人三分
●六十五年以上	十八人九分二厘
●七十年以上	十一人八分八厘
●七十五年以上	十二人九分三厘
●八十年以上	十四人九分一厘
●八十五年以上	十七人一分五厘
●九十年以上	二十八人七分六厘
●九十五年以上	二十三人九分五厘
●百年以上	三十五人

右は昨十七年一月一日調なり六十年以下は女子の方男子より少數あり是れ出產の時平均男子の數多きと男子ハ女子に比すれば强壯にして六十年以下にて死亡する者少きに因るなるべし又六十年以上は女子の數男子より多きハ世事に鞅掌せざるゆゑ長命あるべし然れどもこハ統計學上の一大問題なり

○婦人慈善會記事

本會と專ら規摸を泰西の貴婦人義捐金に取り啻に資金を捐輸するのみあらず身躬ら製作賣鬻の勞を加へ其獲る所のものを擧げて咸く慈善事業を補助するの資に充てんとするに在り客歳六月上院第一次出品會を開設したるに其我邦未曾有の業たるにも拘はらず幸に貴婦人非常の勞力と世間慈善家の翼賛とに由り實に望外の好結果を得たりき今也會約を履で來る十一月十九、二十、二十一の三日間（午後零時より同五時まで）をトし第二次出品會を內山下町鹿鳴館內に開かんとす依て出品は同五日より十日までを期し別に品名、個數、番號、相當代價幷に出品者住所氏名を記したる出品目錄を副へ同館內に設けたる本會事務所へ引渡し其期日を過ぎたるものは凡て其出品を謝絕するものとす

　但一時金員を寄附し又は今回限り製作品を出さんとせらるゝ諸君は委員の紹介を以て本文期日內に事務所へ申出を乞ふべし

　明治十八年十月三日決議　　婦人慈善會

出品場受持委員第一番より第十番に至る左の如し

第一番｛川村伯爵夫人　芳川夫人　大木伯爵夫人｝　第二番｛井上伯爵夫人　森夫人　山內侯爵夫人｝

第三番｛柳原伯爵夫人　井上夫人　松方伯爵夫人｝　第四番｛戶田伯爵夫人　大村子爵夫人　前田伯爵夫人｝

第五番｛鍋島侯爵夫人　山田伯爵夫人　西鄉伯爵夫人｝　第六番｛山縣伯爵夫人　寺嶋伯爵夫人　井田夫人｝

第七番｛伊藤伯爵夫人　佐々木伯爵夫人　樺山子爵夫人｝　第八番｛大山伯爵夫人　長岡男爵夫人　岩倉公爵夫人｝

第九番｛德川侯爵夫人　山尾夫人｝　第十番｛毛利公爵夫人　吉田夫人｝

●假名の答（八）　吉備大臣天平勝寶年中大和の都に於て五音の文字の点畫を看取て片假名五十字を作るこれ本邦かなのはじめなり平假名は弘法大師の作ありと諸書に云へり今喋々するを要せず然れ共平と云

は平易の義にして誰にても分り易からしむる所以なり(西島楳所、朽木、渡邊へい、春風庵三笑)

●倭と和との問(十六)　倭をまゝ歌などに和の字を用ゆるを見たり和の字を倭と讀むは如何なる義か明解を乞ふ(常陸、伊藤いさ女)

●眉毛を削る問(十七)　我國婦女子夫家に歸ぐの后ち眉毛を削るは何等の原因ありや其故を問ふ(愛媛、三名壽太郎)

廣告

本月五日に發行の**文學雜誌**は都合に依り**文學叢誌**と改題仕目下再願中に付き御許可相成次第發行可仕候此段御注文の諸君に報告す　萬春堂

●婦人改良論の投書文は總計一百十一通これあり目下甲乙取調中に付得點者の分は次号より掲載すべし

●文學叢誌

壹冊正價郵稅共六錢　十冊前金同五十六錢　毎月貳回　見本六錢

第壹號目錄●文學叢誌發行概旨●文學叢誌の切要を論ず●作文金言數項●歐米諸國著作家の癖●文法、文章の十欲、文章の七貴忌、文章の九法、爲文八格、文の淵源、譯文の巧拙、新聞記者詩歌文集沼間、藤田、古澤、末廣等其他諸先生數首●ウイリアム、シセクスピアの傳●小說、人肉質入裁判●助語の活法、稱名詞林數件、始製文字の說●寄書、詩歌數首●文士の驕傲を警戒す、文評の妙言、古文學者の精勤●俳文、古机記●速記法の便利●羅馬字にて日本語を書く方●假名の會の記事●雜報、小說改良外數件●問答數件●諸報告數件(御注文は前金を要す)

發行所　東京芝區西ノ久保櫻川町八番地　**萬春堂**

●林英吉著

設問法

一名問題作り方　至六冊　第一編總論一冊

定價二十錢郵稅四錢切手ナレバ一割增

設問法ノ授業及試驗ニ必要ナルヿ固ヨリ論ヲ待タズ然ルニ我國教育ノ日尚淺キヲ以テ未タ之レヲ論述スルモノアラズ隨テ授業及試驗上ニ於テ之レヲ誤ルモノ多シ是レ實ニ遺憾トスル所ナリ依テ設問法ノ目的ヨリ效驗ノ在ル所ヲ說キ其問ヲ發スルニ臨ミテ宜シク注意スベキヿ及今日行ハル、所ノ弊ヲ發摘シ之ヲ總論各論ニ分チ一々之レヲ詳論ス世ノ教育ニ從事セラル、所ノ教員學事監督者ノ爲メニ坐右ノ一友タランヿヲ欲スルニ外ナラザルナリ

右ハ今般出版致候ニ付テハ其事務ヲ一切傳習社ヘ委任致候間御注文其他爲替取組等總テ傳習社宛ニテ御差出シ被下度第二編モ追テ出版致候也　右出版人

取扱所　東京芝區源助町十一番地　傳習社

社坂

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

報告

●雑誌前金滞りの時は一度び端書を以て御催促申すと雖とも御入金なき時は郵税先拂ひを以て再び御督促申し尚夫にても御送金なき時は雑誌廣告欄内へ貴名を掲載し御催促可申候

●雑誌代金は總て前金たりと雖ども別段御斷りなき迄は引續き遞送可仕候但し前金に對する部數將に盡んとする時は別段申上げざるも再び前金の御廻金を乞ふ

●雑誌代金郵券を以て御遣しは堅く謝絶す若し實際不便不得止の地は其金額一割増を以て御送金を希ふ

●雑誌代價通運を以て御送金の時は東京通運會社迄の賃錢は勿論同會社より弊堂迄の配達料（壹錢）をも最初御差立の際御拂置き可被下候

右之通　**萬春堂會計係**

●團々珍聞

十月三日發兌　五百十二號目録

○洒蛙説、衣服の改良○珍報、種々、當世見立論語、珍

文漢文○狂書、相馬の飛出し、書生の苦學○和漢欄、狂詩歌句都々逸○出放題、一筆書解、同新題○英和對譯内外奇譚、東京有名競を掲ぐるに付今回は此二欄を省く○一週要報、各新聞社説表、要報種々

發兌所　東京神田雉子町　團々社

詩文添削

詳細本誌三號ニアリ

東京麻布谷町卅八番地　梅花吟廬

發行所　東京芝區西ノ久保櫻川町八番地　**萬春堂**

持主兼印刷人　大庭宗吉

編輯人　近藤賢三

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町　巖々堂
同　神田區雉子町　團々社
同　日本橋區新葭町　良明堂
同　日本橋區馬喰町二丁目　自由堂
同　京橋區木挽町一丁目　萬字堂
同　京橋區銀座二丁目　山口福松
同　牛込區白銀町　活神堂
愛知縣名古屋本町二丁目　石版社
岐阜縣美濃國笹土居町　星菱書房
越後國長岡　大橋書房
大坂北區中之島二丁目廿六番地　旭香舍

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY